キャンパス通信 ippeki

一碧

01 特集／
世界を舞台に活躍する卒業生

授業紹介
03 4年生
04 1年生／2年生
05 3年生／大学院
06 卒業生・修了生紹介
07 キャンパス日記
08 INTERNATIONAL ACTIVITIES
09 看護部長からのメッセージ
10 研究室訪問

第8号
2014.10▸2015.3

「福岡県日赤紺綬会創立55周年記念総会」

福岡県日赤紺綬会創立55周年記念総会に黒衣姿の本学学生9名が参加しました。福岡県日赤紺綬会とは、赤十字の国際性と人道的使命に賛同し、金色有功章を受章された有志の方々のご発意で結成された赤十字支援団体です。学生たちは約600名に及ぶ大会参加者の前で壇上に登り表彰者へお渡しする賞状の受け渡しのサポート等を行いました。

ひとりを看る目、その目を世界へ。

日本赤十字九州国際看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

特集 世界を舞台に活躍する卒業生

時枝 夏子（学部2期生・大学院5期生）
日本赤十字九州国際看護大学
成育看護領域　助手

キャンパスライフと出会い

私は2002年の春、2期生として日本赤十字九州国際看護大学に入学しました。私の大学生活は、恩師と素敵な仲間との出会いによって、充実した4年間となりました。大学3年生の夏、国際協力がしたいという夢への第1歩として本学の選択科目である「国際保健・看護Ⅱ」の海外研修に参加しました。約10日間に亘り、当時軍事政権下にあったミャンマーに滞在しました。ミャンマー赤十字社をはじめ、各国際機関の事務所に行き活動の説明を受けたり、村を訪問して住民の方々と話をしたり、現地の看護学生と交流をしたりしました。私たちは、毎日いつの間にか誰かの部屋に集まって、夜な夜な「国際協力って何だろう」、「よそ者の私たちに何が出来るのだろう」と悶々と、それでいて熱く語りあっていたことを思い出します。答えのない議論でしたが、皆それぞれに、国際支援の現場での活動に思いを募らせていきました。ミャンマーでの最後の夜、恩師は私たちにこんな言葉を投げかけてくれました。「私は沈む夕日だけれど、あなた方は昇る太陽です」と。私はこの言葉を聞いた時、恩師はまだまだ私たちの頭上で燦々と輝く太陽であると感じました。同時に、恩師の期待に応えられるよう、高く昇る太陽の放物線をイメージしながら、これからの人生を歩んでいきたいと決意しました。

福岡赤十字病院の手術室にて（写真左）

「国際保健・看護Ⅱ」の授業にて
ミャンマーを訪問（写真左）

就職後の歩み

卒業後、私は赤十字職員として国際支援の現場で働くことを目標に、福岡赤十字病院に就職しました。就職後は外科病棟、ＩＣＵ、手術室で経験を積みました。福岡赤十字病院には既に国際支援の現場で活躍されている先輩方がおられ、院内で行われる国際活動に関する勉強会に参加して、先輩方の体験談を聞くこともできました。私が手術室に配属された時、実際に国際的な活動経験がある先輩と一緒に働くことが出来ました。ある時、彼女に、手術中に医師が行う縫合の仕方を覚えておいた方が良いと助言をいただきました。日本国内で看護師が外科的な縫合を行うことはありませんが、国際支援の場では現地の看護師が縫合をする国もあり、私たち看護師が正しい縫合の技術を必要としてくることもあるということでした。このように、先輩方はいつでも国際派遣の要請に応えられるように、日々の業務の中にも将来につなげる視点を持って働いていました。日本で看護師としての基本的な技術と姿勢を身につけることは最低限必要なことで、それを国際支援の現場での活動に生かすためには多くの可能性や状況を考えて準備しておく姿勢が必要であると教えられました。

私はこのようにして福岡赤十字病院で経験を積みながら、国際派遣要員になるための各種の研修（ＩＭＰＡＣＴ[1]や危機管理研修などを受け、ＴＯＥＩＣの必要点である７３０点を獲得し、就職して４年目に国際派遣要員として登録されました。その後、本学大学院に進学して保健学の修士号を修了しました。大学院では貧困やジェンダー、文化的な慣習が健康にどのような影響を与えるのか、また人間の安全保障について学ぶことができ、国際看護の現場で人々の健康を捉える考え方に繋がりま

1 International Mobilization and Preparation for Actionの略で、日赤から海外に派遣された際に、職務を全うするために必要な国際救援・開発協力の実践的知識や技術を修得することを目的とした研修

した。卒業後は本学の成育看護領域の助手として就職し、助手になって2年目にして、いよいよ兼ねてからの夢であった国際支援の現場で働くチャンスがやってきました。

フィリピン中部台風復興支援事業への参加（2015年1月～3月）

赤十字の職員として国際支援の現場で働くには、大きく分けて2つの支援方針があります。1つは大きな災害が起こったあとの緊急時の短期支援で、もう1つは災害後の復興支援や開発協力といった長期的な支援です。私が今回参加した活動は、2013年11月にフィリピンを襲った台風ハイエン（現地名：ヨランダ）後の復興支援であるフィリピン中部台風復興支援事業（以下、本事業）です。本事業の概要は、台風により破壊された住居の改修、生活再建に必要な資金の提供、ヘルスセンターの医療資材の補充、地域と学校を中心とした災害に強い組織作りと衛生施設の整備、防災・衛生教育を行うというもので2014年4月から2016年12月までの期間で計画されたものです。私は今回、学校で行う事業（支援対象校9校）のサポート要員として、既に活動を行っている2名の日本赤十字社（以下、日赤）の要員に合流するかたちで配置されました。

この学校事業は、トイレや手洗い場の改修や保健室の物品の整備といったハード面と、子どもたちへの保健衛生教育や防災に関する知識の普及といったソフト面の双方からのアプローチで展開されています。このような事業の大枠はフィリピン赤十字社（以下、PRC）の復興ガイドラインに沿って日赤が方針を固めています。しかし、実際に事業を運営していくのは現地のPRCスタッフで、私たち日赤スタッフは、そのスタッフのモニタリングと管理が中心的な役割となります。国際支援の現場で働きたい人の中には、現地に行って実際に注射をしたり、医師の診療の介助をしたりすることを思い浮かべる人が多いかもしれません。緊急時の支援等ではそのようなことが求められる場合もありますが、多くの場合、国際の場で働く時に外から支援に入った者に求められるのは、その国で働き続ける現地のスタッフを育成することです。

カウンターパートとの話し合い風景（写真右）

従って、私がフィリピンで過ごした日々は、事業が当初の計画どおりに進行しているかをモニタリングしながら、その過程で起こる問題や想定外の事件に対応することでした。問題が起こる度に、私は経験豊富なもう1人の保健要員と共に、その問題の発生理由・経緯について現地スタッフと話しあいました。その中で、事業運営において現地の方々に問題となる考え方や姿勢がみられる場合は、相手が納得できるように説明し行動変容を求める関わりを行いました。このように言葉で説明するのは容易ですが、なかなか相手が納得して行動を改めるまでには時間と根気を要し、その難しさを実感しました。しかし、そのような困難の中にも、現地のスタッフと共に少しずつ目標を達成していくことに、国際協力の楽しさを感じながら、2ヶ月というあっという間の活動を終えました。

フィリピンで再確認した国際の場で働く魅力

フィリピンでの活動中に出会った、あるPRCの若い女性スタッフが私に、ハイエン直後に緊急支援に派遣された日赤看護師と彼女が一緒に働いていた時の思い出話をしてくれました。日赤看護師の1人が患者の手当てをする時に必要な知識を、PRCのスタッフに実に分かり易く説明してくれたということでした。例えば、傷を負って診療所にやって来た患者を手当てする時に、傷の汚れをしっかり洗い流してから消毒をする必要があることを、リンゴを使って説明したそうです。まずは何も手を加えていないリンゴの表面に砂をつけて洗うと、すぐに汚れは洗い流されます。しかし、りんごの表面にフォークでいくつも傷をつけて砂をつけると、水で流しても、そのフォークの跡に入り込んだ汚れは容易にはとれません。自分たちが対応するのはこのような傷を負った患者であり、しっかりとその汚れを洗い流してから消毒をするようにと説明したそうです。PRCのスタッフは皆「なるほど」と驚きの表情を見せたそうです。その他にも、その看護師は脱水時の人体の状態について水を含ませたタオルを絞って説明したり、大人と子どもの水分喪失が全身状態に与える影響の違いを、大きさの違う容器に水を入れて実験的に教えてくれたりしたそうです。どの説明も、PRCのスタッフには納得の連続でとても勉強になり、日赤のスタッフと一緒に働くことが出来て本当に良かったと話していました。

私はこの話を熱心に意気揚々と話す彼女の姿と、現在も続く彼女のPRCでの献身的な活動をみて、彼女は間違いなくこのフィリピンの保健衛生の問題改善において貴重な人材として育っていることを確信しました。外から入ってくる支援者は多くの場合、いつかその地を離れます。よって開発協力において地域に根付いた住民主体の活動を展開して行く重要性は、持続発展性という観点からよく謳われ、私自身も理解はしています。しかし、前にも述べたように実際にフィリピンに来て活動をしていく中で、そのことを具現化するためには様々な困難があり、工夫が求められることを実感しました。なぜなら、そこにこそ文化や習慣、考え方や物事の見方の違いが大きく影響してくるからです。しかし、このPRCスタッフの話を聞いた時、外から一時的に支援に入ったとしても、双方の違いを越えて相手の心に生き続ける知識や技術を残すことができるのだと感動しました。同時に国際協力の奥深さとその魅力に改めて触れることが出来ました。

支援対象校の高校生との記念写真

国際的な活動を目指す学生さんへ

国際支援の現場で働きたいと希望する人の中には、その思いだけで術をもたない人がいることがあります。しかし、熱い思いだけでは不十分で、自身の中に相手に還元できる経験と知識を蓄える必要があります。そして、もちろん語学力も大切です。

本学では、語学教育はもちろんのこと、リベラルアーツを強化しています。「ひとりを看る目、その目を世界へ」向けるためには、基礎的な看護の知識と技に、人々の健康の維持・促進に影響する生活スタイルや経済、国際情勢など私たちを取り巻く環境的な素因に精通した考えを持つ必要があるからです。そして更に、そのような広い視野を持った上で、国際支援の現場で働くためには、どのような苦境に立ってもそれを糧にできる精神力と他者との関係性を大切にできる姿勢が必要であることを、フィリピンでの活動で感じました。世界は広く、看護の可能性も無限です。是非、皆さんも高い志をもって世界に羽ばたいてください。

授業紹介

Class Introduction

Class Introduction

専門性強化実習Ⅰ Good Practice賞表彰式 4年生

専門性強化実習Ⅰにおいて、主体的に実習の企画と実施を行い、優れたレポート記述を行った4年生3名にGood Practice賞が授与されました。

山口貴生

循環器病棟における看護師の役割と機能について学ぶため、心筋梗塞や心不全を患っている2人の患者さんを2週間受け持ちし、看護過程の展開を行いました。学内実習期間には、循環器疾患に関わる解剖生理から疾患についてしっかり学習し、実習中は、目の前の患者さんから多くのことを学び、看護師の機能や役割についても学ぶことができました。卒業後には循環器病棟で働きたいと希望しているため、この実習を通し、自分の理想とする看護師像の獲得にもつながり、とても深い学びを得た実習となりました。

狩野遥香

産業保健領域で実習を行い、職場巡視、安全衛生委員会への参加、健康教育の立案と実施、産業医面談・特定保健指導への参加、健康診断結果からの保健指導など、企業における産業保健活動の実際とその役割について学びました。特に、健康教育において、災害時など物品が限られた状況下での応急救護として、三角巾ではなくスーパーのレジ袋を用いた処置を紹介し、実際に応急手当てを体験してもらったところ、「ためになった」「いざというとき、今日のことを思い出したい」など高評を賜ったことを覚えています。

安藤仁美

離島における救急医療の在り方と現状および課題を理解し、看護師の役割について学ぶことを目的として、島根県にある離島の病院と本土の救命救急センターで実習を行いました。離島での病院実習では、救急時の対応の説明や実際の話を聴くこと、病棟や訪問看護先でのケアの実施や外来、往診の見学と一部ケアの実施などをさせていただきました。この実習は、施設との調整など大変なことも多かったですが、その分、終えた後の達成感も味わえる実習でした。

写真左から１番目：山口貴生さん　写真左から２番目：狩野遥香さん　写真左から３番目：安藤仁美さん

1年生

Class Introduction

妊婦、高齢者疑似体験での調理実習を終えて

人間工学の科目で妊婦・高齢者疑似体験での調理実習を行いました。人間工学という科目は、人間の能力・特性に適合した機械装置や設備環境について学習し、保健医療看護の分野への応用を考える科目です。今回の調理実習は、妊婦キットや高齢者スーツを着用し、手袋をはめ、耳栓をした状態で行いました。私は高齢者スーツを着用して参加しました。高齢者スーツの裾には重りが入っており、高齢者の方が感じる手足のだるさを実感する事ができました。実習を終え、今まで講義で習った、座ったままで調理ができる調理台や持ちやすい包丁などがどのような要望に基づいて開発されたのかがよくわかりました。今後、病院実習などで実際に患者さんを受け持ったときに、今回の人間工学の授業で学んだ視点を大事にしてコミュニケーションをとっていきたいです。

記: 1年生　吉田 恵

Class Introduction

医療施設での看護過程の応用実習を終えて

2年生

2年生では、医療施設での実習を前期と後期に1度ずつ行います。前期の実習では、情報収集やアセスメントを通しての対象者理解で精一杯でしたが、後期の実習では、看護計画の実施・追加・修正を行うことで、患者さんのニーズに沿った個別性のある看護を提供することができました。変化する患者さんの状況やニーズに適応しながら看護することはとても大変なことでしたが、看護者の行うケアが患者さんの生活の質に大きく影響することを身を以て感じ、ケアの重要性を痛感しました。看護について改めて理解を深め、目指すべき看護師像や自分に足りていない部分を明確にすることができた有意義な実習でした。

記: 2年生　名和川 梨香

大学院

Class Introduction

研究計画相談会を行いました

12月12日、大学院1年生10人が研究計画相談会を行いました。今までに試行錯誤しながらやっとたどり着いた現時点での研究計画を、初めて学内の多くの方々の前で発表しました。初めてということもあり、緊張しましたが、院生一人一人がそれぞれ異なった研究テーマを発表し、お互いに刺激を受け、また領域を超えて先生方からご指導をいただく機会となり、有意義な時間となりました。研究者の卵として、半歩程度を踏み出した日となり、よい経験の場ともなりました。

記: 大学院 1年　一同

大学院

Class Introduction

研究中間報告会を行いました

11月7日、大学院2年生5名の研究中間報告会を行いました。

それぞれが専攻領域における研究テーマについて、リサーチクエスチョンをもとに研究方法を決め、データを収集し分析を進めて、まとめを行う時期での報告会でした。発表では、緊張の中、限られた時間で研究のプロセスを伝えるというプレゼンテーションの難しさを痛感しましたが、様々な領域の先生方より貴重な助言をいただき、新たな気づきや疑問点の解決に繋げることができ、まとめの方向性を再考することができたことは大きな成果だったと感じています。

研究科長より、リサーチクエスチョンに対しどう答えを出していくのか、そのためにどのような分析方法をとったのかを明確にすることが重要であり、今後はそれを踏まえてより質の高い論文にしてほしいという言葉をいただきました。

今回いただいた助言を活かして、より良い研究の成果へつながるように、修士論文の作成に取り組んでいきたいと思います。

記: 大学院2年生　木村 きよみ

3年生

Class Introduction

4年生の国家試験激励会を開催しました

2月9日に第104回の看護師国家試験および保健師国家試験の受験票配布が行われました。試験までの残りの日数、そして試験当日を万全の体調で臨んでいただけるよう、3年生から4年生の先輩方に応援メッセージを添えた贈り物をお渡ししました。先輩方が本番で最大限の力が発揮できるように私たち後輩は全力で応援しました。長いようであっという間に過ぎてしまう1年を無駄にしないよう、国試対策委員全員で活動し、学年全体を引っ張っていくことを改めて皆で再確認した日でした。

記: 国家試験対策委員長　3年 森 ふみ

3年生

Class Introduction

文献検索ガイダンスを実施しました

3年生を対象として、文献検索方法の復習を兼ねたデータベースのガイダンスを実施しました。3年生は現在、「卒業研究」に向けて教員と面談を行っており、各自の研究テーマを明確化する時期です。

ガイダンスに参加した学生は、自分が興味のあるテーマに関するキーワードでデータベースを検索し、得られた文献情報の一覧を熱心に確認していました。どのようなキーワードを用いれば効果的かと質問する学生や、文献の入手方法について尋ねる学生もおり、個別にアドバイスをしながら検索を促しました。

参加した学生からは「自分の中でぼんやりとしていたテーマが具体化した」や「参考になる文献が見つかった」などの感想がありました。

記: 図書館

卒業生・修了生紹介

谷口 友世さん

Tomoyo Taniguchi

2011年　看護学部修了
武蔵野赤十字病院　看護師

私が働く循環器内科.心臓血管外科病棟には、カテーテルや心臓血管外科の手術を受ける急性期から慢性期に至るまでの患者が入院しています。当科に所属する慢性心不全の認定看護師が中心となり勉強会や研修会をひらき、スタッフ全員が専門性をもった看護を提供することを目指しています。

看護師には患者を想う心、看護について学ぶ姿勢、そして体調管理が必要と考えます。学生時代に学んだ赤十字の原則は患者を救うことを意識し働く今の姿勢につながっています。医療現場は多忙な環境で重労働であるため、学生時代から基礎体力を備えておくことが大事です。本学は国際的な活動を行なっており、学生のうちから海外に視野を向けることのできる環境は強みだと思います。自分が理想とする看護師像や興味をもてる分野をみつけてください。看護師の仕事は人と深く関わることのできるやりがいのある仕事ですよ。

重松 小貴子さん

Sakiko Shigematsu

2014年　大学院看護学研究科修了
日本赤十字社医療センター　助産師

私は本学大学院の助産教育課程を修了し、助産師として日本赤十字社医療センターに就職しました。大学院では自分で実習の目的や方法を設定することができ、自分が助産師としてどのような働き方をしていきたいかについて考える経験となりました。現在は、周産母子ユニットの中でも妊婦を対象とする病棟に所属しています。入院により、思い描いていた妊娠生活とかけ離れた生活を強いられた妊婦の中には、精神的な理由や、社会的な理由から臨床心理士やソーシャルワーカーの介入が必要となる場合もあり、個人に合わせた介入の必要性を日々感じています。分娩後に明るく母乳哺育に取り組まれている様子をみると、分娩介助だけが助産師の役割ではないと改めてやりがいを感じます。

CAMPUS DIARY キャンパス日記

2014年10月19日 地域行事「釣川クリーン作戦」に参加しました

10月19日(日)に開催された宗像市とむなかた「水と緑の会」が実施する「第23回釣川クリーン作戦」に本学学生と教職員あわせて14名が参加しました。

このイベントは、宗像市の水源である釣川周辺の清掃活動をするもので、参加した学生からは、「道路脇にゴミがある印象はなかったけれど、思ったよりポイ捨てのタバコの吸い殻やペットボトルなどがあって驚いた」「毎日通学しているエリアですが、普段通らない道路を歩いたりして改めて自然豊かな大学周辺のことを知る機会になりました」等の感想が寄せられました。今回、本学近くの冨士原公民館周辺の100名以上の地域の方と一緒に活動し、環境保全への熱い思いを感じるとともに、自然環境について考える良い機会となりました。

2014年10月4日 アグリスクール第3講に参加しました

10月4日(土)私たちは、JA 福岡中央会、JA粕屋の皆様のご協力のもと、アグリスクール第3講に参加しました。参加者は本学の学生20名と福岡教育大学の学生10名の計30名です。

今回は成長した稲の見学、さつまいもの収穫、さらにドレッシング作りと、新米の食べ比べをさせていただきました。

さつまいもの収穫では、土が想像以上に固く大変でしたが、その分収穫できたときは、みんな笑顔でとても楽しい作業となりました。ランチ交流会では二種類の新米を食べ比べ、どちらが自分の好みの味であるか、一人一人それぞれに意見があることを実感しました。

最後は自分の好みのお米で、JAの方々が作ってくださっていたカレーをいただきました。そのカレーにはさつまいもも入っていて、辛さの中に甘さがあり、とても美味しかったです。

アグリスクールに参加して、普段経験することができない貴重な体験をすることができました。この経験を通じて得たことを食生活、栄養、健康を学ぶ中で生かしていこうと思います。

2014年12月6日 学生奉仕団ティンクルが救急箱薬品補充と交換を行いました

私たち「学生奉仕団ティンクル」は、12月6日(土)に日本赤十字九州国際看護大学奉仕団として救急箱の薬品補充と交換に参加しました。

当日はあいにく、雪交じりの雨が降り大変厳しい天候でしたが、日本赤十字社福岡県支部職員の方と共に糟屋郡篠栗町の若杉山山頂付近と福岡市南区の油山市民の森、花畑園芸公園に設置されている救急箱の薬品補充と交換を行いました。この救急箱は、日本赤十字社福岡県支部が設置しているもので、訪問者の突発的な怪我に備えていつでも無料で使用できるようになっており、中には三角巾やガーゼ、包帯、絆創膏、消毒などが入っています。私たちはこれらの薬品に不足がないか、また期限切れがないかなどを点検し、補充や交換を行いました。

実際に若杉山の山頂まで登りましたが、途中の坂が大変険しく、このような場所に救急箱があると、怪我の応急手当ができ、安心して登山を楽しむができることから、改めて救急箱の重要性について学ぶ良い機会となりました。

今回初めての参加でしたが、救急箱が常に使用できる状態を維持するためには、定期的に補充と交換を行うことが重要だと感じました。これからもこの活動を続けていけるように、友人や大学の後輩たちに救急箱の薬品補充と交換の大切さを伝えていきたいと思います。

海外活動

INTERNATIONAL ACTIVITIES

平成26年第14回国際シンポジウムの開催

2014年11月5日、「母子健康手帳から始まる世界とのつながり　～当たり前であることの素晴らしさ～」をテーマに、第14回国際シンポジウムを開催しました。本学の学生、教職員をはじめ地域の方々、総計107名の参加者がありました。

本年度の国際シンポジウムは3部構成で、第1部では、学生による「母子健康手帳の概要と利点」に関する基調報告がありました。母子健康手帳は健康な子どもを育てるうえで親の助けとなり、親と子をつなぐための大切な記録であることが発表されました。

第2部は、長い間、母子健康手帳の国際的な普及活動に従事してこられた国際母子手帳委員会事務局の板東あけみ氏に講演していただきました。諸外国の母子保健の改善をめざし、母子健康手帳が導入されており、日本の母子健康手帳が国際的に貢献していることは、板東氏の海外での経験にもとづくもので、とても説得力がありました。海外で母子健康手帳の普及活動に、関心を持つきっかけとなる大変興味深い講演でした。

交流会を含む第3部では、参加者が交流を深め、板東氏の話も伺うことができました。また、母子健康手帳に関するクイズをしながらグループディスカッションを行うことができ、とても有意義な時間になりました。

国際シンポジウム実行委員　広報担当

国際母子手帳委員会事務局　坂東 あけみ氏

インドネシア国立アイルランガ大学看護学部短期留学生を受け入れました

2014年11月に本学との国際交流協定にもとづき、国立アイルランガ大学看護学部の交換留学生ウィ･ウィンさんとイリヤ先生が来日し、本学での看護や語学の講義、看護演習、さらに福岡、今津の赤十字病院、NGO小児がん支援施設や宗像市での3歳児検診の見学などに参加しました。また、11月5日には本学の国際シンポジウムの参加を通して、学部･大学院の学生、教職員と積極的にふれあいました。

「日本の看護、看護教育について多くの学びを得ることができました。特に印象に残ったことは、生活援助方法の演習や、今津赤十字病院での老年看護実習でした。インドネシアではまだ日本のように高齢化が進んでいないことから、高齢者を対象にした施設はあまりなく、日本での学びを将来、インドネシアでの老年看護の発展に役立てていきたいと考えています」と語りました。

さらに日本文化（着物着付け体験やお祭りへの参加）や歴史（長崎原爆資料館、平和公園、宗像大社などを訪問しました）を学び、日本とインドネシアとの友好を深めました。

留学の最終日には、お世話になったお礼にとウィ･ウィンさんが出身地である中部ジャワの伝統民族舞踊「孔雀の舞」を学生、教職員、地域の方々に披露してくれました。

国際看護実践研究センター長　五十嵐 清

着物の着付け体験

ウィ・ウィンさんによる
民族舞踊「孔雀の舞」

2年生 生活援助方法演習を見学（右：ウィ・ウィンさん、左：イリヤ先生）

看護部長からのメッセージ

MESSAGE

わたしたちと一緒に
赤十字の未来をつくりましょう

長崎 NAGASAKI

日本赤十字社長崎原爆諫早病院
看護部長 **福田　妙子**

日本赤十字社長崎原爆諫早病院は、県立病院から経営移譲を受け10年を迎えました。「赤十字の精神のもと、地域並びに被爆者の皆様に『心のこもった良質な医療』を提供します」を病院の理念として、小規模ならではの“顔が見える関係”のチームワークで地域に根差した内科急性期病院としての役割を担ってきました。

これからは医療と介護の役割分担・連携強化が重要となり、病院看護師としては自施設の役割を理解し、その人らしい生活支援を推進していかなければなりません。在宅復帰を視野に入れた地域包括ケア病床の開設とともに、看護部では病棟における退院調整認定看護師を育成し、早期から支援する体制を作りました。また、新人看護師教育では「全員で育てる風土作り」をモットーに、一人一人が役割を担っており、開院後からの新人看護師離職率0%は、一層の自信に繋がっているようです。

学生時代にはもっと多くの人と知り合い、もっと多くの考えに触れていただきたいと思います。なぜならそれが人としての成長と自己実現に繋がると考えるからです。命を大切に思う心、人を深く理解しようとする姿勢、そして倫理性を大切に、学生時代にしかできない経験をたくさん積んでいただきたいと思います。

長崎 NAGASAKI

日本赤十字社長崎原爆病院
看護部長 **中村　清美**

日本赤十字社長崎原爆病院は、被爆者の皆様の医療・健康管理と、赤十字病院としての社会的使命を担っている地域中核病院です。

さて、超少子高齢化を迎える2025年に向けて推進している医療制度改革では、医療機関の機能分化・強化と医療連携、在宅医療の充実等を挙げています。急性期の医療から地域（在宅）へ切れ目なく医療を繋げていくためには、更なる多職種連携のチーム医療の推進、そして、何より地域の皆様との医療連携・強化が求められて参ります。職員数の多くを占める看護職員には、その専門性の発揮と役割拡大の期待は大きく、「チーム医療のキーパーソン」としての役割をしっかり果たしていかなければなりません。当院の看護部では認定看護師による『地域連携オープン講座』をスタートさせました。地域の皆様との繋がりを大事に、一体となって地域の医療・看護の質向上に努めて参りたいと思っています。

言うまでもなく、看護は「私」という個々が全身全霊で「ひと」に向き合う仕事です。「ひと」としての成長が何より大事です。多くの「ひと」との出会いを大切に、様々な価値観に触れ、日々、成長できるような有意義な学生生活を過ごされることを願っています。

「赤十字の使命」を心に、皆さんと共に赤十字の看護師として歩んで行ける未来を待っています。

熊本 KUMAMOTO

日本赤十字社熊本健康管理センター
保健看護部長 **牛島　絹子**

日本赤十字社熊本健康管理センターは、1978年（昭和53年）日本赤十字社で唯一の予防医療の専門施設としてオープン以来、赤十字の“人道、博愛”の精神の下「すべての人に健康を、健康に全力を」を理念に、予防医学の先駆者としての意識をもち、人間ドックをはじめとする各種健康診断、がん検診のほか、生活習慣病予防のための啓発活動、健康増進事業、外来診療、調査研究事業を実践してきました。

看護要員は現在104名で、保健師33名、看護師41名、看護助手24名、看護関連事務職6名が、「人にやさしく思いやりのある心」をもち、質の高い予防医療と看護サービスの提供を行っています。安全で安心な検査の提供はもとより、受診者がより健康で生活できるように、お一人おひとりにあった支援をめざし、産業カウンセラーや糖尿病療養指導士など新たな資格を獲得し、研究課題をもつなど常に自己研鑽して専門性や豊かな感性を磨いております。また、働く看護職がお互いを尊重し、いきいきと働ける職場環境づくりに努めています。

平成26年度 学部進路状況

卒業生103人（看護師／93人・保健師／2人・進学等／8人）

赤十字施設	
福 岡 県	福岡赤十字病院
	今津赤十字病院
	嘉麻赤十字病院
佐 賀 県	唐津赤十字病院
長 崎 県	日本赤十字社長崎原爆病院
大 分 県	大分赤十字病院
熊 本 県	熊本赤十字病院
鹿児島県	鹿児島赤十字病院
沖 縄 県	沖縄赤十字病院
山 口 県	山口赤十字病院
兵 庫 県	神戸赤十字病院
大 阪 府	大阪赤十字病院
	高槻赤十字病院
神奈川県	横浜市立みなと赤十字病院
東 京 都	武蔵野赤十字病院

進　学	
福 岡 県	日本赤十字九州国際看護大学
	西南女学院大学助産別科
	遠賀中央看護助産学校助産学科
山 口 県	山口県立大学別科助産専攻
東 京 都	日本赤十字社助産師学校

その他の施設	
福 岡 県	九州病院
	北九州総合病院
	九州大学病院
	九州労災病院
	小倉記念病院
	産業医科大学病院
	千鳥橋病院
	原三信病院
	福岡市立病院機構福岡市立こども病院・感染症センター
	福岡市立病院機構福岡市立病院
	福間病院
	国家公務員共済組合連合会浜の町病院
	国立病院機構九州医療センター
	国立病院機構福岡東医療センター
	糸島市（保健師）
大 分 県	新別府病院
宮 崎 県	宮崎大学医学部附属病院
沖 縄 県	琉球大学医学部附属病院
山 口 県	山口県済生会下関総合病院
	山口大学医学部附属病院
広 島 県	福山市(保健師)
大 阪 府	大阪府済生会泉尾病院
千 葉 県	国立がん研究センター　東病院
東 京 都	国立成育医療研究センター
	国立精神・神経医療研究センター
	国家公務員共済組合連合会東京共済病院
	東京大学医学部附属病院
	東京都済生会中央病院
	日本医科大学付属病院
	国家公務員共済組合連合会虎の門病院
北 海 道	市立札幌病院

「日本赤十字九州国際看護大学運営審議会」答申について

本学では2014年11月に、8名の外部有識者から構成される「日本赤十字九州国際看護大学運営審議会」を開催し、今後の大学運営及び大学教育の質保証に関する学長の諮問事項について、ご意見、ご助言をいただきました。運営審議会は、本学の現状について客観的に評価し、大学の改革改善を促す目的で設置されたものです。

今年2月5日（木）、審議会会長である谷井博美氏（宗像市長）から、本学の教育理念が現代のニーズに合致しているかについての諮問に対し、「社会的ニーズは多様化しているものの医療者としての使命と自覚を持って困っている人には自然と手を当てることができる看護職者、すなわち「人道の理念」を主体的に行動にできる人を育てるべきである。」と答申がありました。

来年度も引き続き、本学の教育研究、地域貢献、管理運営等、幅広くご意見をいただく予定にしています。

日本赤十字学園大塚義治理事長の講演

2014年1月29日に日本赤十字学園の理事長の講演が、「看護の道を志す皆さんに　～いま改めて、赤十字とは、看護とは～」というタイトルで本学オーヴァルホールにて行われました。当日は実習で学外に出ていた2年生も大学に戻って、多くの学生、教職員が講演を聞くことができました。日本赤十字学園も日本赤十字社の一員であり、日本赤十字の看護教育の歴史とその建学の精神を踏まえ、看護・医療を展開すべきであると述べられました。学生たちも赤十字の一員としての自覚が深まり、看護のこころが赤十字の精神につながることを学ぶよい機会となりました。

日本赤十字学園理事長　大塚義治

研究室訪問

人にはみんなひとりひとり個性ある生活があり、ご自宅の中はその人らしさがあふれています。病気や障害を持って療養する人の生活空間で看護を提供するのが在宅看護です。従って、在宅看護では病気や障害が生活に及ぼす影響をよく見極め、専門的関わりを通してご本人やご家族からの信頼を得ていくことが重要です。私は訪問看護の実践経験の中で、終末期を病院ではなく自宅で過ごす方とご家族に対する支援が特に対応の多様性が求められると感じていました。また、これまで看取った経験のないご家族がほとんどなので、その不安は大きく看護師の役割は大きいものでした。実際に自宅で看取ったご家族に研究として話を聞いてみると、想像以上に多くの苦悩を抱えていたことがわかり、ご家族の心理的な支援に焦点をあてた研究をしています。終末期の方のご家族の心理的な支援は、グリーフケアと呼ばれる分野であるため、私の研究について臨床心理士の大学院生の方から問い合わせをもらうことが多いです。

「本当に看護実践に活かせる研究がしたい」というのが、看護師5年目に立てた目標でしたが、その目標が達成できるように精進していきたいと思っています。

ヘルスプロモーション・在宅看護領域　教授

小林　裕美 先生

ランチョンミーティング開催状況

	月 日	テ ー マ
第7回	10月10日	***インドネシアにおける老年看護の現状と今後の展望*** （講師）インドネシア保健省基礎看護課長 ムルヤディ・リヤント氏
第8回	10月14日	***知的書評合戦 ビブリオバトル（第2回学内予選会）*** （講師）本学学生 岩見隆、内村亜里紗、冨永花子、 山下恵李圭、吉田恵
第9回	10月29日	***学内献血に参加しよう！*** （講師）学生奉仕団 2年生
第10回	11月 7日	***宗像国際環境100人会議に参加して*** （講師）本学学生 國田歩美、高木杏、藤井紗也
第11回	11月17日	***北里大学夏期研修プログラムに参加しました*** （講師）本学学生　唐田佳奈 本学助手　金丸多恵
第12回	12月 2日	***東日本大震災の被災地　宮城県を訪ねて*** （講師）本学学生 濵田佳奈、林めぐみ、吉田恵
第13回	12月 5日	***アメリカ海軍佐世保基地ヘルス・クリニック看護部長サラ・チャンバラスさんとの意見交換会を開催しました*** （講師）アメリカ海軍佐世保基地ヘルス・クリニック看護部長 サラ・チャンバラス氏
第14回	1月20日	***（報告・発表）タイ国立コンケン大学病院と産業保健などについて*** （講師）本学准教授 森中惠子、力武由美
第15回	1月28日	***夢に向かって一緒に走ろう*** （講師）メイク・ア・ウィッシュ 東京事務局長 大野寿子氏

12月30日　西日本新聞
ふくおかで学ぼう!
世界で活躍できる看護のプロを育成

4月27日　西日本新聞
台風禍のフィリピンへ
助手・時枝さん復興支援

大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空が一続きになって一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名付けられました。
「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とが一続きにつながって欲しいとの願いが込められています。

題字：4年生 吉田 歩さん／福岡県・柏陵高校出身

日本赤十字九州国際看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行: 日本赤十字九州国際看護大学 広報委員会

〒811-4157　福岡県宗像市アスティ1丁目1番地
Tel.0940-35-7001　Fax.0940-35-7021
http://www.jrckicn.ac.jp/

寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは、本学ホームページでご確認をお願いいたします。